

THE YMCA

日本YMCA基本原則

私たち日本のYMCAは、イエス・キリストにおいて示された愛と奉仕の生き方に学びつつ世界のYMCAとのつながりのなかで、次の使命を担います。

私たちは、すべての人びとが生涯をととして全人的に成長することを願い、すべてのいのちをかけがえのないものとして守り育てます。

私たちは、一人ひとりの人権を守り、正義と公正を求め、喜びを共にし痛みを分かちあう社会をめざします。

私たちは、アジア・太平洋地域の人びとへの歴史的責任を認識しつつ、世界の人びとと共に平和の実現に努めます。

2015年5月1日発行(毎月1日発行)
1947年10月27日 第三種郵便物認可
本体価格45円(外税)(送料62円)
発行/公益財団法人 日本YMCA同盟
〒160-0003 東京都新宿区本塩町7
TEL: 03-5367-6640 FAX: 03-5367-6641
URL: <http://www.ymcajapan.org/>
発行人/島田茂 編集人/山根一毅
印刷/あかつき印刷株式会社

YMCAで多様性を 受け入れるということ

ウエストクックYMCA 前総主事 ジャン・ペイト



私とYMCAとのつながりは、ボランティアとして始まりました。次にスタッフとなり、総主事を務め、米国YMCA同盟で国際部を担当した10年を含めると、YMCA歴は25年になります。この間、最も強い思いをもって同僚のスタッフと話し合ってきたことは、「YMCAでいかに人びとの多様性を受け入れ、生かしていくか」でした。

YMCA運動の根底には「すべての人を一つにしてください」(新約聖書「ヨハネによる福音書」17章21節)があります。ですから、YMCAの施設やプログラムがすべての人に開かれていることも、一見当然のことのように思えます。しかし、私たちも人間です。それぞれが異なる人生経験や世界観を持っているからこそ、時には問題にも直面します。

YMCAで多様性が受け入れられるということは、誰もが、いつでもYMCAに来ることができ、ここが自分の居場所だと感じられるということです。互いの違いを理解し合い、違いがあるという素晴らしさに気付くことこそが、私たちの働きを支えています。

その一方で、これまで違いを持つが故に社会に受け入れられなかった人びとを支えることも忘れてはなりません。大切なのは、彼らのもとに行き、耳を傾け、支えること。これはYMCAの精神である、すべての人に仕えるということです。私たちは、彼らが社会の現実に向き合い、その現実の中で成長していくことができるように支えていく必要があります。それは、恐れや不安、これから

立ち向かわなければならないことについて、彼らと話し合うことでもあります。

何年もかけて作られた偏見や固定観念をなくすには、それを常に意識し、強い意志を持って取り組む必要があります。人びとの多様性を受け入れ、生かされるようにするという方針は、スタッフやボランティアの採用からプログラムや長期計画の実践に至る、YMCAが取り組むすべてのことにまで浸透させ、その上で実践していかなくてはなりません。多様性とは、民族や人種といった一つの面のみにとらわれない、私たちに関わるすべてを意味します。多様性を受け入れ合うとは、一つの傘に入っているようなものです。互いを遠ざけるような行動は取らず、互いに近づくことで理解が深まり、相手に対する尊敬の思いが生まれるのです。

私たちの社会が多様性を受け入れるためにできること、やるべきことはまだまだあります。そのために、YMCAはリーダーシップを取らなければなりません。YMCAの未来だけでなく、地球という星の未来を担う若い世代にとってのリーダーでなくてはならないのです。多様性を受け入れる世界を目指すという使命は、未来を担う若者たちへ受け継ぐ財産であり、この財産こそが世界を平和へと導いていくのです。この使命を実現することは、あまりにも大きな挑戦ですが、YMCAが困難へのチャレンジにひるんだことはありません。そしてこれからも私たちYMCAは、この使命実現に向けて、ひるむことなく立ち向かっていくのです。

REPORT

順手と向き合って心を合わせていくこと。
(仏語: 愛和・共感の関係の鍵)

イエス様の十字架のプリズムで世界を見る

富山小泉町
キリスト教会 牧師
みん ぷんじやん
関 丙俊

幼いころから雨上がりに天と地をつないでくれる美しい虹が大好きでした。恐らく虹が嫌いな人はいないでしょう。虹は聖書において、二度と洪水によって人類を滅ぼすことはないという神様からの約束の印として紹介されています。

虹の正体は、私たちの肉眼では見ることができない太陽の光です。その光が空中の水滴に当たって屈折することで、本来の光が持つ美しい色を現しているのです。そこで、虹を見るために人が作り出したものが「プリズム」という透明な道具です。太陽の光をプリズムに通すと7つのきれいな虹色が私たちの目の前に現れます。すなわち、プリズムはもともと隠れていた美しく素晴らしい虹色を見えるようにしてくれるのです。

今私たちが生きている世界は、目に見えるものを優先し、目に見えるものにとらわれた世界と言えましょう。それ故、いじめや暴力、差別、争い、奪い合いなどで満ちているのです。しかし、聖書は言います。「あなたの目に見えるものだけに心を奪われることなく、むしろ、隠れて

目に見えないが確かにあるものを見るようになりなさい」と。

聖書は、神様が世界のすべての人をご自分に似せて創造されたことと記しています。さらに、すべての人を罪と悪から救うために、神のひとり子イエス・キリストを十字架にかけて死なせたと教えます。

神のひとり子イエス様がすべての人を愛し命を捨ててくださった十字架こそ、神様の最高のプリズムです。この愛のプリズムを通して世界を見、あなた自身と隣人を見ることができれば、あなたは今まで見たことのない美しさと素晴らしいさに気付くでしょう。この世のどんな人も神の似姿に造られ、神が命を懸けて愛されている素晴らしい存在であることが見えてくるのです。この世に価値のない人はいませんし、美しくない人もいないのです。

「だから、キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造された者なのです。古いものは過ぎ去り、新しいものが生じた。」(コリントの信徒への手紙 二 5章17節)

Vol 8

We All Belong to YMCA

YMCAの活動に参画するユースからの発信

◆東京大学YMCA

◆内容：1888年に創立した学生寮。現在20人（男女、留學生）が共同生活を送り、早天祈禱会や聖書研究会、OB交流会などを行っている。入寮条件は「東京大学学部/大学院の学生にして、キリスト者あるいはキリスト者たらんとする者」。



右から2番目が王さん

私が東京大学YMCAに入寮したのは、2011年の東日本大震災が起こった直後でした。当時の私は、中国の浙江省から来日したばかりで、まだ日本社会の文化やルールに疎い上に日本語を理解する自信もなく、自分を役立たない存在と捉えてはストレスをためたという、今までの人生で一番つらい時間を過ごしていました。しかし、東京大学YMCAの日本人寮生たちは、一言の文句も言わず、数多き欠点を有する私を温かく受け入れ、私を実際の能力以上に認めてくれました。近年、一部の日本人の中で東アジア隣国の人びとに対する排斥感が高まる傾向がありますが、学生YMCA寮では、偏見を持った思いや言葉を感じることは一切ありません。それほど親しい隣人愛や広い包容力がある場所なのです。

昨年からは、女子学生の受け入れと留学生定員数の拡大を決めました。寮にとって大きな変化でしたが、「人間/他者」に対する愛（隣人愛）が土台にあれば、寮の伝統を受け継ぎながら、これまで以上に豊かな交わりができるはず。東京大学YMCA理事長の原田明夫さんはよく、「文明間の対話」と「断絶を乗り越える」ことの大切さを教えてくださいました。「抱えず自己中心的な思いを批判し、他者を受け入れること」。これが寮生たちと共に過ごしたこの4年間を通して、私が学んだ貴重な真理です。

おうきくよ
王 旭東（東京大学大学院 博士課程5年）

心のどこかでずっと YMCAに通っている

りお せい
とちぎYMCA 保護者 廖 瑞宜さん

わが子のさくらんぼ幼稚園入園を機に、YMCAとの関わりはますます深くなり、卒園後もYMCA主催の活動に参加するために、折あるごとにYMCAに通っています。人情味にあふれ、信念を持って「思いやり、誠実さ、責任感、尊敬心」という普遍的な価値を大切にしている。だからこそ、期待も信頼もできるYMCAが好きです。

気が付けば、私ととちぎYMCAとの関わりは12年目に突入しました。結婚して台湾から来日した当初、日本語がまったくしゃべれなかった私は、「人のぬくもり」を求めてYMCAの英語上級クラスに通うようになりました。わが子が幼稚園に入園してからの3年間はPTAの一員として活動し、他にもホストファミリーや子ども英語クラスのサポート、園児への多言語絵本読み聞かせ、中国語通訳、中国語講師なども務めました。たくさんの人と出会い関わることで、忘れられない思い出がいっぱいできました。

わが子においても感動した思い出があります。英語が得意なわが子が「今後も楽しく前向きに学習を続けてほしい」、そんな願いを持って、読み書き中心のクラスではなく、教科書のない楽しいクラスをYMCAのスタッフに提案したところ、その夢のようなクラスが本当に実現したのです。わが子は現在も、英語を使いながらのお菓子作りや感屋観察、変色牛乳実験、LED電気実験など、夢のようなクラスでたっぷり楽しい時間を過ごしています。小学生となった今も、町を歩いていると、なじみの幼稚園バスを探すがすっかり習慣となっています。幼稚園に入園したあの日以来、わが子は心のどこかでずっとYMCAに通っているかのようなのです。

積極的に「違い」と出会う

関西学院大学YMCA(神戸三田キャンパス) 学生メンバー
バナジー ジョティ 千歳 サラフィーナさん

インド系イギリス人の父と日本人の母のもとに生まれたハーフであるからでしょうか。生まれも育ちも兵庫県、生粋の関西人の私ですが、昔から「人種差別」というテーマには強い関心があり、大学では「人権」を軸に学んでいます。

日本では最近、FacebookやTwitterなどの自由な言論の場においても、政治的意見を語ると批判されてしまうことがあります。今の社会全体に、他者の意見を選別し、都合の悪いものは排除して抑圧しようとする構造があるように感じます。

私が所属する学生YMCAには、自由な議論の場があります。他者の意見を否定するのではなく、むしろその違いを糧に、自分自身の成長へとつなげていこうとする風土があります。私はこれまでに、全国から学生が集い互いに学び合う夏期セミナーや地球市民育成プロジェクト、大阪の釜ヶ崎・生野区を訪ねるSCM*現場研修などに参加し、自分にはなかった知識や発想、そして考え方を持つ人たちからたくさん刺激を受け、物事を多面的に捉えて熟考し判断することの大切さを学びました。

どのような「価値観や固定観念」を持つかによって、人は人を排除したり傷つけたりすることもあれば、反対に誰かを認めたり救ったりすることもできるのだと思います。人種差別の背後にある偏った価値観や固定観念を覆すためには、何よりもまず、「違い」を知るきっかけが必要です。学生YMCAでは、「違い」と出会い、新しい情報が自らの思考をグルグルと回り、それらと必死に向き合う過程を経て、自分の内に新しい視点が生まれまします。私たち一人一人が自分にとって新しい世界と積極的に出合える場が増えていくことで、社会を少しずつ変えていけるのだと思います。

*SCM… Student Christian Movementの略。
学生キリスト教運動のこと。



細胞から 変えられていく経験

在日本韓国YMCA 韓国伝統楽器教室 受講生 朴 京美さん

YMCAと私の関わりは長く、十数年前、在日の子どもたちを対象に在日韓国YMCAが実施する国際文化教室にボランティアとして参加したことが始まりでした。政治やイデオロギーから離れて、在日の仲間同士で、純粋に韓国の言葉や文化に触れるその教室で、私は伝統楽器のカヤグム(韓国の琴)の初歩を教えていました。

残念ながらその教室は、親たちの伝統文化への関心が薄れてきたこともあり、長くは継続しませんでした。今は「あの時ボランティアとして関わっていて本当に良かった」と思うことがあります。それは、当時教室に通っていた子どもたちが、成人して「あらためて韓国の伝統文化を学びたい」と、現在の韓国伝統舞踊教室や楽器教室に舞い戻ってくる姿を見たときです。その度に韓国の伝統文化に肌で触れた感覚というのは、子どもたちの中に確かな意味を持って残っていたことを実感しています。

私は、在日韓国人2世として、韓国人のコアにある世界に関心を持って、長い朝鮮半島の民族文化を研究し人に伝えることに関わってきましたが、YMCAで韓国の伝統舞踊や伝統楽器を純粋に愛し、踊ったり奏でたりする喜びを全身で表現する日本人受講生の姿から、その素晴らしさや奥深さをあらためて教わることもあります。

言葉も旋律もリズムも、自分の体に染み込ませるには長い時間がかかります。それは、細胞レベルでその文化を愛し、尊重し、細胞から変えられていく経験ではないかと思うのです。そのような文化の愛し方、継承の仕方を、在日韓国も朝鮮も日本もない「教室」で実践しているのがYMCAだと思っています。



世界の人びとと共に 平和の実現に努めます

広島YMCA スタッフ
スティーブ・コラックさん

私がシカゴの大学を卒業して来日したのは1977年。最初、熊本YMCAで勤務し、次に派遣されたのは長崎YMCAでした。長崎で働き出して間もないころ、同僚から秋月辰一郎さんを紹介されました。自らも被爆しながら、医師として被爆者の治療にあたった秋月さんは、YMCAにつながる人たちに平和を実現してほしいという期待を語られました。そのお話をきっかけに生まれたのが、長崎YMCAの「クリスマスカード・ピースパッケージ・プログラム」です。子どもたちが平和への願いを込めて作ったクリスマスカードを、被爆された方々の絵や詩、長崎市長のメッセージと一緒に「平和の小包」として、世界各地のYMCAに毎年届けています。

そして現在、私は広島YMCAで国際交流プログラムを担当しています。毎年8月に行う「国際青少年平和セミナー」は1977年に始まって以来、国内外の多くの青年が広島で出会って過去の戦争と向き合い、未来に向けて平和への思いを語り合う貴重な場となりました。被爆70年を迎える今年、平和セミナーは37回目を迎えます。

私は、原子爆弾によって深い傷を負った2つの都市で働くことになるとは、来日当初は想像していませんでした。長崎での20年と広島での15年を通して、私は原爆の悲劇を生き抜いて来られた多くの方々に出会いました。被爆された方々の証言と、人類の生命を脅かす核兵器の廃絶を訴える声を聞くたびに、私は強く心を動かされます。日本YMCA基本原則にある「世界の人びとと共に平和の実現に努める」ことこそが、長崎と広島のYMCAに遺された私の使命だと信じています。



奔走する日々の中で 得たもの

ちよう な
北九州YMCA スタッフ 張 娜さん

現在、北九州YMCAの日本語学校で、主に中国人学生の生活面を指導する校務主任を務めています。もともとは、2005年4月に留学ビザを取得して中国から来日し、同校の日本語教師養成科に通う学生でした。当時私は33歳、一児の母でした。

同校を卒業し、スタッフとなったばかりのころは、全国的に中国からの留学生数が急増していた時期で、私に対応すべきこともたくさんありました。病気や事故、住居探しや妊娠、外出先でのトラブルなど、日本で生活する中でさまざまな悩みや壁に直面した学生たちのために日々走り回りました。その多くは、私自身も経験したことがないようなものばかり。父親のような厳しさや母親のような優しさを持って学生たちの問題と真剣に向き合ってきましたが、これまでの自分の判断や対応の一つ一つが本当に正しかったのか、正直、今思い返しても分からずじままです。

ただ、一つ確かなことは、学生たちと共に歩んだこの9年間で、私自身が人として大きく成長できたということ。YMCAで得たたくさんの出会いと、「人として一人前になることができた」という実感は、私の人生の宝物です。後悔することがあるとすれば、毎日の忙しさのために娘とじっくり向き合う時間をあまり持てずに来たということです。幸いにも元気に育ってくれた娘に、面と向かって伝えられたことは少なくとも、日々奔走する私の姿から何かを感じ取ってくれていたらうれしいです。





●福島県内で宿泊キャンプを実施

—東京YMCA

2月21～22日、福島県の磐梯猪苗代高原にある「アルツ磐梯スキー場」で、福島に住む小学生を対象に宿泊キャンプ「わいわいキッズスノーキャンプinアルツ磐梯」を行いました。

震災後初めて福島県内で実施となった同キャンプには、スキー初心者の子どもの含む29人の子どもたちが参加しました。YMCAのボランティアリーダーが生活をサポートし、リーダーOBで現在スキー場のガイドを務める中島力さんと彼の仲間がボランティアでインストラクターを担ってくれました。日中はスキー、夜は宿でレクリエーション大会を行い、キャンプソングも歌いました。2日目のスキーセッションでは、インストラクターよりモーグルやフリースタイルスキーの技の披露もあり、子どもたちからは歓声が上がりました。

東京YMCAが震災後に取り組んできた短期保養リフレッシュキャンプは3月で56回を数え、これまでに2,000人以上の方々を山中湖センターや妙高高原ロッジへ招待しました。また、2013年2月からは、福島県郡山市内での屋内子どもプログラム「わいわいキッズ in 郡山」を行っています。こうした福島での支援プログラムを継続する中で、「ぜひ県内でのキャンプを企画してほしい」との声が高まり、線量の低い地域での宿泊キャンプの実施に向けた調査・検討を重ねていた折に、賛助会員である日清製粉グループの担当の方より協働のお話をいただき、今回のキャンプを実施することができました。30人の募集に対して、146人も応募があった同キャンプは、他にも星野リゾートアルツ磐梯、スナック倶楽部、香港日本人補習授業校、香港中華YMCA、俱進会など、多くの方々のご協力に支えられました。

震災から5年目を迎える現在も、福島県内では日常生活における放射線の健康被害が懸念され、屋外での遊びや活動が制限されるケースも少なくありません。東京YMCAでは、今後も継続的な支援を行ってまいります。

東京YMCA 村上 祐介 (現 ぐんまYMCA)



29人の子どもたちが福島県内のスキー場で遊びとスキーを楽しんだ

●未来の森づくりデイキャンプを実施

—熊本YMCA

3月15日、阿蘇の豊かな自然の中に広大に広がるYMCA的の石キャンプ場にて、会員交流の一環として「未来の森づくりデイキャンプ」を実施しました。

「阿蘇の里山保全」をテーマに、九州電力株式会社と協働で実施した今回のデイキャンプ。前日から行われていた「未来の森づくりファミリーキャンプ」への参加者も含め、企業関係者とその家族、そしてYMCAの会員約100人がキャンプ場に集い、ブルーベリーやオリーブの植樹活動を行いました。

当日は、植樹活動には絶好の雨の中、花壇づくりや食事の準備を行うグループと、地ごしらえや植樹を行うグループに分かれて活動しました。植樹の後には、パン作りやピザ作りも行い、和やかな時間を過ごしました。参加した子どもたちからは、「大変だったけど楽しかった」「植樹した木が大きくなってほしい」「成長を見にまた来たい」という声が聞かれました。

実施にあたっては、現地を下見し、話し合いを重ね、その中で「持続性があり、地域社会にも貢献するもの」「季節ごとの活動や楽しみがあり、未来を担う子どもたちが地域の人と一緒にできるプログラム」を念頭に置いて企画しました。熊本YMCAは、地球環境について考える記念日、アースデイ(4月22日)にも植樹活動を実施。夏には下刈り、秋にはブルーベリーの収穫やジャム作りなど、地域の人々が里山保全をしながら、四季折々の産物を楽しむ環境プログラムの実施を計画しています。

YMCA的の石キャンプ場では、2015年度に阿蘇市の防災避難所も建設される予定です。今後、ますます地域住民の大切な居場所となることが期待されるYMCA的の石キャンプ場から、新たな文化の発信をしてみたいです。

阿蘇の豊かな自然保全を願って植樹活動を行った

熊本YMCA 神保 勝己



●フィリピン台風被災地支援ワークキャンプを実施

—名古屋YMCA

2月24日～3月1日に、フィリピンのパナイ島イロイロ市タンバリザ地域で、フィリピン台風第30号の被害にあった小学校の屋外ステージ修復のワーク、小学校で日本の文化紹介の授業、および、地域の方の家でのホームステイを実施しました。

同ワークキャンプには、名古屋YMCAの他、とちぎYMCA、YMCAせとうちからも7人のユースが参加しました。初めは「コミュニケーションをどうとらえるのか」「お風呂やトイレはこれでいいのか」等、参加者の表情から不安や戸惑いの気持ちが見て取れました。しかし、柱を埋めるための穴をスコップやバールを使って掘るワーク、子どもたちと遊んだり、歌ったり踊ったり、ごはんを食べたり、生活を共にする中で次第に打ち解け合い、お互いを大切な仲間として受け入れ合う様子が見受けられました。

2013年11月に「過去に類を見ないほど猛烈」といわれた台風30号がフィリピン各地を襲った後、イロイロYMCAも被災地域に位置していましたが、それでもスタッフやリーダーはタンバリザに何度も赴き、地域の人との信頼関係を作り上げてきました。昨年5月には、世界のYMCAからユースが派遣され、現地の人びとを勇気付けたいと懸命に支援ワークを行いました。そして、今回のワークキャンプにおいても、多くの人がさまざまな準備を担い、実施を支えてくれました。こうした力強い土台があったからこそ、私たちはあたたかく迎えられ、力を尽くすことができました。

今回の参加者が行ったワークは限られたものではありませんでしたが、決して小さな働きではありませんでした。参加者は、子どもたちと思い切り遊び、地域の踊りに涙を流し、子どもの夢を応援し、多くの人と話し、一緒に歌い、踊り、台風の被害について真剣に考えました。その一つ一つが、世界に目を向けた優しい心を育む糧となることを信じています。今後も、多くのユースと共に、遠くにも応援している気持ちを伝えていきます。

名古屋YMCA 遠藤 恵美子



イロイロ市の小学校で日本文化を紹介。折り紙の風船で遊ぶ子どもたち

●国連防災世界会議

パブリック・フォーラムに出展

3月14～18日に仙台市で第3回国連防災世界会議が開催されました。今後15年間の国際的な防災の取り組み指針として採択された「仙台防災枠組」には、教育や福祉など多様な分野で役割を担う団体や人材の重要性が盛り込まれました。また、会議の一環として行われたパブリック・フォーラムでも、NPOやNGO、企業などから350以上の出展があり、東日本大震災での経験や未来に向けた取り組みが共有されました。

YMCAは3月14日に「災害から尊い命を守るために」をテーマとして、横浜YMCA三浦ふれあいの村で実施されている防災ウォークラリーを紹介しました。その中で、子どもたちが自分の命を守るための仕組みづくりに取り組む早稲田大学大学院准教授の西條剛夫氏、津波に襲われた大川小学校に通っていた犠牲者の遺族として防災教育に取り組む東松島市矢本第二中学校教諭の佐藤敏郎氏、横浜YMCAスタッフの大塚英彦氏によるシンポジウムを行いました。次に、仙台YMCAの隣にある公園でウォークラリーを実施し、その様子は地元の新聞にも掲載されました。ウォークラリーを通して子どもたちに「自分の命を守るために考え行動することの大切さ」を伝える取り組みに対して、「自分の町内でもぜひ取り組みたい」という参加者からの声もありました。

3月15日には「災害支援者へのメンタルケアの必要性とその課題」をテーマに、YMCA東山荘で行う「支援者のための心のリフレッシュプログラム」の講師でもある帝京大学名誉教授の中谷三保子氏らによるフォーラムを開催。国内ではまだ一般的でない「支援者への支援」について、心理やレクリエーションの専門家などと共に学ぶ機会を持ちました。

支援者であるが故に自分を犠牲にして働く人びとが多くいる中、支援者自身がもっと大切にされるべきであることへの理解を来場者からいただくことができました。

日本YMCA同盟 山根 一毅



仙台YMCAの子どもたちも防災ウォークラリーに参加した